

自然を護る鍵は文化を守る思想

20世紀後半を駆け抜けた小さくて大きな自然保護運動

進藤 賢一

はじめに

2003年度後期の文化学部文化学研究所「北海道地誌特論」では大学院授業内容検証の一環として04年2月、夕張地域巡検をおこなった。

地域の基幹産業であった20カ所に余る炭鉱が1960年代後半からスクラップアンドビルド政策によって閉山と新規開発を繰り返すなかで、石炭産業全体がゆっくり安楽死させられ、夕張地域の人口は60年代の12万人から03年の1・4万人まで減少した。

夕張市に限らず、産炭地域はエネルギー資源転換の70年代以降、人口流失に伴う地域崩壊を防ぐために誘致条

例を設定して、企業進出に優遇策を与え、レジャー型観光施設や休養施設をつくり、各種イベントを創出して雇用を確保し、税収を獲得・担保しようとした。それぞれ悲喜こもごもの結果が出てきている。

夕張市において石炭産業の衰退は地域崩壊をもたらしたかにみえるが、新産業として日本一のメロン産地を育成し、他方では夕張岳開発を住民の手によって阻止した。人口こそ急減したが、住民のなかに生きていく誇りのようなものが芽生えつつある。

メロンの産地形成には輝かしい先見性とマーケティングがあり、巨大資本の地域乱開発に対しては地域住民の英知と行動力があつた。地域の文化や自然を護ることが住民運動の原点であることを確かめながら、ほんの僅か

な主婦達の工夫と行動力によって担われてきたことも特筆すべき現象である。

この二点に關し大学院生と地元関係者との間で地域政策、国土利用政策、地域開発のあるべき姿と住民参加のあり方を討論し検証することができた。

1 夕張炭鉱地域の陰の部分

夕張市、古い世代の人々には、日本の高度経済成長期「黒いダイヤ」を生産する日本最大級の炭鉱都市のイメージで脳裏に深く刻まれていた。

「黒いダイヤ」は日本の経済成長を支える大きなエネルギー源だったのである。

炭鉱都市夕張は、美唄、芦別、上砂川、歌志内、赤平、砂川、奈井江など石狩炭田の中心に位置していた。

そして、石炭産業の興隆と崩壊過程で、これらの産炭地域は多かれ少なかれ、共通した現象が現れ、共有する問題に晒されていた。

1960年代の夕張市は、人口12万人で札幌(60万)、

函館(24万)、小樽(20万)、旭川(19万)、釧路(15万)、室蘭(15万)(1960年国勢調査)に次いで六番目の都市として繁栄していた。40年以上を経過したいまは人口1万4000人規模に減った。

石炭の城下町といわれたが、炭鉱は三井財閥系の「北炭」(北海道炭鉱汽船)と三菱財閥系の「三菱大夕張」の巨大資本のほか、大小20以上の炭鉱が、細長い夕張川河谷に沿ってまばらに展開していたのだ。

炭鉱労働者の街として、夕張河谷の斜面に沢山の炭鉱住宅街があった。木造長屋で四軒分から六軒分が一棟に繋がり、天井は筒抜け状態で炭鉱夫やその家族の逃亡を防ぐため向こう四軒両隣を相互監視する構造になっていた。この形は第二次体制前からの遺物で、戦前の外国人労働者で中国や朝鮮半島から連行され炭鉱労働者として働かされた人々を監視するために造られた家の構造を模したものだといわれる。

トイレは外屋で共有、軒下には石炭置き場があった。ひしめくように粗末な炭住街に炭鉱夫達は住んでいた。

外国人労働者は、日本人労働者と一定の標高で隔離さ

れ、より高い標高斜面の炭住街を与えられ待遇も悪かった。彼らは鮮人、華人などと呼ばれ、戦前の強制連行者が多く含まれていた。

標高が高いのは、地底深部で一日の作業を終えた後、さらに急峻な坂を登り詰めて帰宅する労苦を外国人労働者に少しでも余計に負わせたまでである。

前貸し制度を利用する娼婦街も外国人労働者と日本人労働者はそれぞれの専用住宅地に用意され、娼婦の出身地も日本人と外国人それぞれ別にされていた。

夕張川の上流部に丁味部落がある。

川沿いに七つ程度の炭鉱入り口が今でもコンクリートで閉鎖されたまま、連続して無惨な形骸を残している。

夕張市市会議員だった田口睦男さんは「これは爆発がある度、抗口を塞いで酸素の流れ込みを閉ざし、人間の命に代えて坑道や切り羽を守った」跡だという。

坑内火災があるたびに、人々は石炭積み出し用トロッコや人車斜坑のレールに沿って抗口に押し寄せる。しかし、抗口はしっかり土嚢が積まれ外に出られず、多くの

炭坑労働者が抗口付近で死んでいた。なかには腕だけが土嚢の外に出て死亡していたケースもあったのだ。

戦前の出来事ではあれ、人命より産業優先思想の流れをくみ取ることができる。

一度、火災があった抗口は使わず、そのとなり、さらにとなりと掘った結果が、こうした産業遺跡を生んだのである。

この田口さんも1981年の北炭新鉱ガス突出事故93人の犠牲者の一人になった。このときも坑内火災鎮火のため、炭鉱夫らの死亡が確認できないまま、坑内には大量の水が注がれ鎮火を急いだのだった。

夕張市の基幹産業であった石炭産業が急速な石油へのエネルギー転換によって次々スクラップアンドビルド化され、やがては全面的安楽死に向かうなかで石炭に変わる地域産業の育成や創造が急務となった。

何処の炭鉱都市でも手がけた工場誘致条例に基づく企業誘致は、必ずしもはかばかしい成果に結びつかなかった。仮に定着した企業があつて若干の雇用創出に貢献したとしても、企業の思惑は地域興しより企業利益中心の

考え方であったから、会社が赤字になれば撤退を余儀なくさせられた。

それでも夕張市統計によると、1997年の工業団地数は6カ所（公団団地5カ所）で面積は55ヘクタール、分譲率70%、操業企業数15、従業員数423人とある。

業種は金属・機械加工（5社）、木材加工、農産資材加工、縫製、時計部品関連（各2社）が進出した。

そんな状況がつづくなかで、東北地方南東部の常磐炭田跡を使った遊戯レジャー施設「常磐ハワイランド」の実践をモデルにした「夕張石炭の歴史村」構想が持ち上がった。

石炭博物館と遊戯施設レジャーランドを結びつけた観光遊興施設である。人口流失現象に歯止めをかけ、夕張活性化の目玉にしようとするものだった。

構想自体集客産業としての意味はあったが、実践段階で問題が起こった。

夕張市と北炭（北海道炭鉱汽船 側は、博物館には石炭になる樹や坑内で使われていた炭鉱産業に必要な道具、機械を展示し、最も古い坑道である天竜鉱を模擬鉱

として使う提案をした。

これに対して「我が夕張」を執筆したグループや炭鉱労働組合は「夕張炭鉱は爆発・災害の歴史に彩られていない。第二次大戦前から炭鉱爆発による死傷者は数え切れない。事故の歴史を展示すべきである」と迫った。

爆発で曲がりくねったレール、真っ二つに割れた鉱夫のブーツ、爆発状況の写真など展示すべきである。戦前は炭鉱労働者の命と引き替えに軍事産業に協力し、戦後は石炭採掘が高度経済成長を支えた真実を伝えるべきだ、という主張である。

それに対して、市と北炭側は悲惨な歴史を展示する意味はない。石炭産業の生成・発展の足跡を伝えれば十分という現現在の歴史村博物館を建築したのである。

「炭鉱で働くひとはいいですよ。住宅も、燃料費もただですよ」という人々が多い。確かに鉱員は仕事が終わって帰宅するときに石炭を背にいっぱい背負って戻る。社員には石炭を車が運んでくれる。

炭鉱夫の労働時間は一日八時間で三交代制が普通。実

質的には作業現場である切り羽にたどり着き、また坑口に戻るまで二時間はかかる。人車やマンベルト、ロープ施設を利用してでもである。昼飯時間を労働時間にカウントするから実質働くのは一日五時間といわれる。

しかし、炭塵に見舞われ人の識別もままならぬ悪条件、坑道は海底にまで及ぶ深部採炭、汗にまみれて働く。常に落盤や坑内火災、爆発の危険と隣り合わせの坑内など、厳しい条件ではあるが、男の仕事として誇りを感じていた労働者も多かった。

別の問題もある。

炭鉱地帯はどこも同じであるが、鉱員（坑夫）と社員（会社事務員）に明瞭な区別がある。社員はいわばホワイトカラー、鉱員はブルーカラーであり、棲み分けされているのみになく差別も歴然としている。従って相互の交流も乏しいだけでなく、お互い対立した関係ができる。

北炭の役員接待所は今日、「鹿鳴館」という名で往時の繁栄の跡を残している。企業幹部はこの接待所で、芸者をあげ、饗宴を楽しんだのであろうが、その影に外国

人強制労働者やたこ部屋にも等しい日本人炭鉱労働者の苦渋に満ちた労働環境があったことは記憶しておかなければなるまい。

第二次大戦後、労働基本三権が成立し、炭鉱労働者は組合をつくり、交渉し、争議をした。

炭鉱労働組合は強かったようにみえた。労働者の権利を守り、生活を支えてきた強い組織体であったが、労働組合執行部などどうしても経営者側と親しくなり、労働者と離反していくケースが目立った。炭労働執行部の御用組合化した事例は枚挙にいとまがない。

生活を守る運動は、命を守る運動と運動しなければいけないはずであるが、必ずしもそうならない。組織運動についての疑問を抱くひとびとも少なからず現れてくる。

こうして、様々な矛盾を包含しながらもエネルギー源の転換の流れのなかで炭鉱地帯の様相も変わっていった。

2 炭鉱閉山後の陽の当たる部分（夕張メロンの主産地化）

03年5月14日、この年の初出荷となった夕張メロンが札幌青果物市場で競り落とされた。毎年、5月中旬は初出荷の時期にあたり、いつもなら三越デパートが27万円から30万円で競り落としていた。今年は進出したばかりの大丸デパートが特秀品2個33万円で購入取り、即日店頭に並べた。ご祝儀相場とはいえ、破格の高値であり、夕張メロンのステイタスの高さを象徴している。

夕張農協の高橋営農部長は、自治体単位で見ると、夕張市の夕張メロンは栽培面積、出荷量、販売額においていずれも日本一である。そして商品の性格は贈答品が80%、個人や会社が食べるために購入するのは20%。贈答されて食べるものであり、自分で購入して食べるものではないとのイメージが定着した。

量的販売では北海道内70%、道外30%のシェアであり、道外向けはすべて航空便で全国市場に配送する。出

荷方式は卸売市場での「競り」が60%、産地主導での「値決め」直接販売が40%というからメーカー主導で価格決定される数少ない農産物に入る。

ここに、夕張メロンがもつ他の産地に見られない特徴が示されている。

どうしてわずかな期間にメロン主産地形成が可能になり、夕張市農業の大黒柱に成長したのであるのか。

炭鉱の崩壊とメロンの主産地化、何処に接点があるのだろうか。

夕張市のメロン農家に後継者不在の問題や花嫁対策問題は発生していない。一旦夕張市から流出した若者達も大抵Uターンして戻ってくる。

生活が安定するだけの収入（月給制を採用している事例が多い）が得られ、この産業の将来に見通しがつくからである。

03年のメロン販売額は35億円、メロン栽培農家数164戸であるから、戸当たり2100万円を稼いだことになる。栽培面積はわずか320ヘクタールでしかないが

メロン生産量は5700トンを超え、夕張市農業生産額の96%を占める。

また、メロン関連のジョイント商品の販売額は100億円を超えている。地域への波及効果と付加価値生産の規模の大きさがわかる。

1戸当たりの栽培面積は2ヘクタール弱で、北海道の平均耕地所有面積の6分の1。夕張のメジャーグループは小規模零細経営のなかで生み出されている。

農家1戸当たりの預金額は7000万円あり、十勝の大規模畑作地域十幌町の1億円について北海道第2位につけているのも頼もしい。

実は、石炭産業が急速に衰退していく1960年代終盤、地域崩壊の危機意識のなかで農業活性化の方向が模索された。

高度経済成長期までは零細再生産農業のなかで、炭鉱を中心に農家の兼業構造ができていたが、炭鉱の崩壊は現金収入源を閉ざされ、収入源を造林や出稼ぎに向かわせる以外なかったから自営自作で換金作物が見つかるこ

とは魅力であった。

もともとメロンはアールスメロンを中心に栽培されていた。全く新しい取り組みではなかった。だが改良が必要であった。

メロン種改良に対して民間の研究機関を使つて新品種の開発や品種改良を行うと膨大な資金が必要となる。北大農学部や農業改良普及員、道や政府機関の指導のもとに、地元農民との共同作業で基本的には道内産のスパイシー種と静岡産のアールスメロン種を交配した一代性雑種「夕張キング」種が1960年開発された。

赤肉、芳香、風味、高糖度、ネットの良さを特徴とするが、日持ちの点で従来型にやや劣る。

栽培初期から、夕張メロンは徹底的な品質管理、出荷管理、市場管理の統制のもとに他地域メロンとの差別化に成功する。

自然環境もメロン栽培に適していた。気温の日較差の激しい盆地型、土壌は樽前系火山灰で一般畑作物には透水性が良すぎるがメロンには最適だった。

小さな産業を活性化することで郷土愛、定着志向が強まればよい。それには、生産者と農協、自治体の三位一体態勢が何より求められた。

根底に流れるものは、消費者の味覚に堪えうるもので、消費者を裏切らない。従って売れば良しとする思想を排除することが重要になる。

一定の品質を保ち続けるためには、栽培指導基準が守られなければならない。5月中旬から8月に渡って市場をコントロールするには生産段階での栽培調整が必要である。

播種、育苗は雪中の2月から加温されたビニールハウスで行われる。農家にとってみれば、最大収穫量を得る適期は分かっているが農協の市場販売状況を見極めた栽培調整に正確に協力しなければならない。

もちろん品物は一元集荷、一元販売であるから、勝手な個人販売はできない。

ロイヤリティは販売額の0・2%、900万円から1200万円と見込んでいる。

はねもの（規格外品）は当初、畑地の肥料として鋤込

んでいたが、良質のものに限り加工品とした。夕張メロンゼリー、同チョコゼリート、同ソフトクリーム、同リキュールなど加工品の商標登録は140点にのぼる。

加工品については、工場に試作品の原料のみ与え、結果を十分斟酌して製品化に踏み切った。

偽物が出回るため法律顧問、弁護士、税理士など法律関係に年間2000万円を支出し、技術盗難や偽物対策に当たる。

不正や偽物を放置するとそれを黙認したことになる。民事より刑事事件として解決する事例が多い。

栽培、収穫、品質検査技術の高度化や種子管理も徹底する。

収穫適期を見極める、いちいち割ってなかを見たり、CTスキャンや光センサーを使わずともメロンの外観から見て糖度や品質が区別できる非破壊検査技術を高め、専門検査員を増やす。

種子庫に入れるのは3人のみ。徹底した種子管理がおこなわれている。

日本一のメロン産地を形成し、それを維持し続けるた

めには絶えず技術を革新し、市場競争力を高め、産地の人々を生き生きさせる。

農村地帯の人々、農民が元気である限り、メロン主産地は安泰である。

3 文化を守る運動に徹したユウバリコザクラの会

夕張市美術館・市民ギャラリーでユウバリコザクラの会創立15周年記念の写真展「花の夕張岳へようこそ」の写真展が開かれた。04年1月27日から2月8日までだった。

この写真展には、ユウバリコザクラ、ユウバリソウ、シソバキスミレなどの固有種高山植物ほか夕張岳の美しい紅葉や崩壊地、冬景色やナキウサギ生息地、高山植物盗掘跡、湿原の裸地化など105点が展示された。

写真撮影はカメラマンの梅沢俊さんらプロからアマチュアまで多くの人々によって撮られたものである。

そして、ユウバリコザクラの会15周年記念行事にふさ

わしい、これまでの運動の一環としての催しであった。

88年11月、夕張岳スキー場開発構想が、突然発表された。

驚いた夕張市の主婦などが対応を協議し、翌89年4月ユウバリコザクラの会を結成した。

夕張岳は日本でも数少ない高山植物の希少種の分布する山岳地帯である。

早速活動が開始される。84年には夕張岳体験登山、そして夕張岳を「国の特別天然記念物指定」する要望書を夕張市に提出した。文化庁、環境庁、夕張営林署にも提出する。230人以上を集めて夕張市で「明日の夕張と自然を考えるシンポジウム」を開催した。

このときのテーマは「夕張岳はだれのもの」だ。

90年には、北大の小野有五教授（ヒマラヤから自然環境を考える）や島根大の保母教授（民活リゾートから手づくりリゾートへ）を招き、91年には道営林局計画課の渡辺淳氏（森林と上手に付き合う方法、北海道自然保護協会の依副会長（天然記念物ってなあに！）、同鮫島淳一郎副会長（夕張岳の移り変わり）の講演会を開い

た。

以降、年2〜4回のペースで植物、地質、地形の専門家を招いて講演会を続けるほか、高山植物盗掘で悩むアポイ岳のある様似町との連携を強めた。

環境庁、林野庁、文化庁を訪れ、高山植物保護を訴え、文化庁調査官を夕張市の講演に招いた。

夕張営林署との間に「夕張岳巡視活動のための森林パトロールボランティア活動」協定を結び全国的に注目される。

「高山植物の盗掘防止の厳罰を求める請願」を法務大臣、法務省、文化庁へ届けた。

01年7月には旭川市でおこなわれた川口環境大臣、風間副大臣とタウンミーティング「環境省に期待するもの」でNGO代表の立場で高山植物を護るための意見交換をおこなった。

北海道が「北海道希少植物保護に関する条例」に指定する高山植物12種のうちシソバキスミレ、キリギシソウ、ユウバリコザクラ、キバナアツモリソウ、ユウバリソウの5種が夕張岳に存在する。希少種だけに盗掘が絶

えない。

主婦の水尾ユウバリコザクラの会事務局長は話す。

「96年夕張岳高山植物を天然記念物として指定」することに成功した。従って夕張岳の高山植物は文化財になった。文化財を盗るのは犯罪だ。しかし、これまで文化財が盗まれても事件にしながらない営林署、高山植物程度と取り合わないのが法務省、文化財に指定したから盗られないことになっています、と返答するのみだった。警察も山に登るのが億劫か、盗掘調査になかなか積極的にならない、という。

水尾さん達は、空知支庁、夕張営林署、夕張市教育委員会を束ねて夕張岳関係者協議会を設置して山岳パトロールや盗掘調査登山実施に向けての運動を繰り返した。懇話会なども時々開いて、また官民合同高山植物パトロールなど官民の連携で希少高山植物を護る運動を展開してきた。

天然記念物は文化財、文化を守ることだ。文化なくして人間はない。天然記念物に指定された高山植物分布で全国で最も多い53種は夕張岳である。誇るべき山ではな

いか。

主婦の水尾事務局長は説明した。

ちなみに天然記念物指定は大雪山が41種、日高山脈は37種、アポイ岳35種、中部地方の飛騨山脈23種、東北方の早地峰山21種の順だ。

4 西武資本による夕張岳スキー場計画と問題点

15年前の88年11月夕張岳に巨大スキー場建設計画が明らかにされたが、これは既に14から15年前から水面下で計画されていたものであると森元会長はいう。その冬、国土計画（西武系資本）と夕張市は、インスブルックオリンピックで史上初のアルペン三冠王に輝いたオーストリアの俳優トニー・ザイラーを招いて夕張岳の山頂付近から滑降させ、スキー場としての有望性をアピールする構想も明らかになった。

夕張岳は標高1668メートル、北海道の既設スキー場であるニセコ、ルスツ、トナム、フラノの1000

メートル〜1300メートル程度の山岳地帯に較べればかなり標高が高いからゲレンデスロープも長くとれる。

さらに西武資本は、美瑛富士、富良野にもスキー場ゴルフ場、リゾートホテルの3点セット開発を進めようとし、また深川、糠平、真駒内にもスキー場を建設した。

夕張岳ワールドスキー場構想について、88年11月1日発行の北海道新聞は次のような記事を掲載している。

「建設主体は国土計画（堤義明社長）、総延長8・2キロのコースは標高1390メートルから590メートルの間に東西4キロ（18ヘクタール）南北4・2キロ（19ヘクタール）のT字型に交わる2本のスキーコースを造成、運送手段としてゴンドラ（延長2・5キロ）、高速リフト2基（同3・6キロと1・77キロ）、などを建設。ゴンドラエプロンに300人収容のレストラン、同ステーションに100人収容のヒュッテ、合計710台の駐車場2カ所を建設する。

総事業費40億円、90年オープン予定で入り込み客目標は初年度8万人、約10年後には12万人としており給水、

汚水、ゴミ処理は数案用意して検討している」

こうして開発計画の概要を明らかにした北海道新聞はさらに夕張岳地域を保護する背景や国民の任務を次のように述べている。

「問題は夕張岳の8、9合目が崩壊しやすい蛇紋岩からなり、ユウバリコザクラ、ユウバリソウなど多くの固有植物が現存、生きた化石ナキウサギの生息が確認されるなど地質、植物、動物学上極めて貴重な山で、富良野芦別道立自然公園の中でも開発行為が著しく規制されている特別地域に指定されている点だ。国土計画の案でも第一種特別地域に11・5ヘクタール、第二種特別地域に21・2ヘクタールかかっている。夕張岳とその周辺の自然は、かけがえない国民の財産として後世に伝え残さなければならぬものであり、国民と行政が手を携えてその重大な任務を果たすことが、今、求められている」と結んだ。

スキー場計画と重なる地帯は変成岩である蛇紋岩地帯であり、日高山脈アポイ岳、天塩山地の天塩岳とならぶ

稀少植物の分布地帯である。

また、日本最大の蛇紋岩メランジュがあり、動物、昆虫の分布から見てもいまままで天然記念物に指定されなかったのが不思議。水源涵養保安林の網にもかかっているし、営林署独自の「夕張岳風景林」地区にもなっている。さらに営林署独自の「更新困難地」でもある、とユウバリコザクラの会の森元さんはいう。

5 ユウバリコザクラの会、夕張岳開発に残した大きな教訓

1988年11月、夕張岳スキー場開発計画がマスコミを通じて明らかになった。

半年後の89年4月、森元さんや主婦の長尾さんなど地元の人々を中心に46人でユウバリコザクラの会が結成された。

これは夕張岳スキー場開発に反対する会ではない。

夕張のこれまでの特徴をみると、大企業の下で活動してきた経過から自分たちで地域をつくるという意識が薄

い。長い間、炭鉱という閉鎖的な社会の中で生活してきた意識の名残りかもしれないが、今後は主役である住民が基本になって地域の活性化を進めなければならぬ。マウントレースイスキー場も地元の意味が入る余地がなく松下興産という企業に売り渡され開業している。

今回は夕張岳の危機を全国に発信していかなければならぬ。スキー場開発に反対する運動だけでは反市長運動を展開することになり、市民を二分する争いになる。

夕張市政は故中田鉄治氏のワンマン体制下であり、市政派に睨まれたら生きていけない状況のなかで「どんなに苦しんでも失ってはいけない」こととして「夕張岳は誰のものか」をテーマに運動を組み立てていったのである。

しかし、閉鎖された地域の地縁体制のなかでユウバリコザクラの会々員は増えないどころか減り続ける。最終的には8〜10人程度の組織になるが、逆に運動は全道、全国に広がっていった。

その理由は、きめ細かい運動の連続性と多様な人脈を駆使した粘り強い活動内容にあった。

ユウバリコザクラの会発足の8ヶ月後には、「明日の夕張と自然を考えるシンポジウム」を開催し、全国から235人の参加があった。

届けられたメッセージは、横路北海道知事、有江元北大学長をはじめ「高尾山の自然を守る会」、「石狩と大雪の自然を守る会」、「日本野鳥の会」、「然別の自然を考える会」のほか地元の中田市長、渡辺教育長からも送られた。市長、教育長はスキー場計画推進派にも拘わらずメッセージを寄せていることは、会の性格をよく表している。

会発足当時から運動の目標は、夕張岳を国の「特別天然記念物」に指定することであり、夕張岳を「文化財」として考えていくことに主眼をおき、多くの有識者に訴えた。

ユウバリコザクラの会は、特別天然記念物指定の要望書を夕張営林署長、文化庁、環境庁に提出する。

この天然記念物指定の運動は後に大変大きな意味を持つてくるのである。

シンポジウム開催のパンフには堀江健二氏撮影の夕張

岳写真とともに、関山昭子作詞、大西進作曲の歌「ユウバリコザクラ」が、運動の原点として飾られている。

水河のときから今も この夕張岳にずっとずっと咲いてきた 私は小さな花

この星にたったひとつの ピンクのユウバリコザクラ 歌う鳥よ 風よ 山裾の森よ

森に生まれる水よ どうぞ伝えてよ ふるえる命あることを ふるえる命あることを

シンポジウム実行委員長であった故八木健三氏（元北大教授・北海道自然保護協会会長）は、地質学が専門の立場から、夕張岳がカムイコタン構造体のなかにある蛇紋岩地帯で、マグネシウムの多い土壌にしか生えない塩基性植物群落が生育していること、天然記念物指定要領書は夕張山岳会からも出されていること、横路北海道知事、有江幹男元北大学長等からシンポジウムにメッセージが寄せられていること、溢れる人々が参加したのはユウバリコザクラの会森元会長、水尾事務局長の心と熱の

こもった説得があったからだ、と挨拶した。

そして八木氏は 私たちは 単に「夕張岳スキー場反対」で赤旗を振っているのではないと、コザクラの会の狙いをもオーサライズした。

そして、国土計画と一緒にスキー場計画を推進しようとしていた夕張市長もこのシンポジウムにメッセージを送らざるをえなかったし、その後もことあるたびに、中田市長は札幌藻岩山山麓の八木健三宅を訪問することになる。

シンポジウムでは植物・山岳写真家として知られる梅沢俊氏がスライドで夕張岳のガマ岩付近に自生する高山植物を紹介した。

純白の花冠をもつカオルツガザクラ、夕張岳特産のタカネエゾムギやエゾノクモマガサ、ユウバリシヤジン、8月に行っても見られる春咲くユウバリコザクラやシソバキスミレ、ウルツプソウの変種ユウバリソウやユウバリンドウなどの固有種である。

そして、最後に同じ国土計画が造った糠平の温泉山ス

キー場の伐採風景が紹介された。

パネルディスカッションは「あすの夕張と自然を考える」で、ユウバリコザクラの会々長森元繁氏、「大雪」と石狩の自然を守る会」の寺島一男氏、「日本消費者連盟」運営委員の神原昭子氏、「北海道新聞」の河野博光氏らによっておこなわれたが、メンバーの出身母体が多様な上に、こうしたメンバーを取りそろえた「ユウバリコザクラの会」の運動視点が鮮明になっている。

夕張岳の自然を守ることは文化を守ることである。天然記念物に指定されれば山の花や木は文化財ではないか。盗掘することは文化財を盗み出すことであるから、警察官や営林署員は取り締まるのは当然という論理が成り立つ。

6 仕組まれたリゾート開発の本質を理解し なければならぬ

土地ブームが去って地価の下落がはじまりリゾート開発熱が冷めて、開発は自然破壊だったという構図が表面

化する。1970から80年代にかけては地価高騰のあぶく銭、余り金の投資先がリゾート開発地域に向かったということに気がつく。

しかし、80年代リゾートブームが進行中の時期にはこの本質にかかわる提言は表面化しにくい。

寺島一男氏は90年のシンポジウムで「リゾートブームは仕組まれたもの」として理由の一つは東京を中心とした土地高騰からくる金余り現象がリゾート開発に向かったこと、二つは、産業界で最も成長したのが余暇産業で、建設・運輸・不動産（リゾート御三家）のほか銀行、生命保険会社、証券会社から鉄鋼、機械、造船、セメントまでが参入したとして具体的事例をあげ、仕組まれた状況を報告した。

この事態を後押ししたのが「森林の保健機能に拘わる特別措置法」。これまで保安林解除は大臣許可事項であったが、この法律は保安林解除なしでリゾート開発ができるというものである。これでは住民の意義申し立てができない。加えて保安林を取得した者は、不動産税、固定資産税、特別土地取引税を支払わなくてもいいとい

う恩典つきである。

「国民のために緑を解放する」いわゆる「ヒューマングリーンプラン」も契約して賃貸した業者の収益に応じて金をとる「収益貸与」が考えられていたと述べている。

こうした大企業を呼び、沢山の人を集める地域振興ではなく、生活基盤の整備さえできれば足下の有形・無形の財産を生かし少ない人数で自由な発想で生きていく方法を編み出したらどうだろう、と結んだ。

寺島氏のこうした論調をここに掲げたのは、リゾートブームが勢いを増している時代に逆らう考え方、本質問題に及んだことはユウバリコザクラの会メンバーに大きな力を与えたからである。

7 おわりに

夕張岳ワールドスキー場構想は、中田鉄治市長の「一時凍結」発言をもって収束した。事実上、開発からの撤回である。

この時期、折からの経済不況、地価の下落、余暇投資資金の欠落など周辺環境の変化も後押しした結果、多くのリゾート計画が空中分解した。リゾート開発のための手厚い制度的保護の柱になった「総合保養地域整備法」や「森林の保健機能の増進に関する特別措置法」などを持つとしても経済不況の波には勝てないといった収束説がある。

しかし、夕張岳開発に関する限り、10人程度の地元住民、わけても主婦をはじめとする女性達の夕張岳を愛する思想が花開き、地域や文化を守る粘り強い運動として全国展開した意味は大きい。

長年に渡って夕張市民が見つめてきた炭鉱労働組合の組織活動や地域や労働者の権利を護る運動が持っていた矛盾に悩まされ続けた人々が、本来の人権を回復し、地域で失ってはいけないものとはなにかを真剣に考え、夕張岳を天然記念物指定に導いた。天然記念物は文化財であり、地域文化の象徴であるとの認識にたって幅広い運動を展開した。

力で開発推進派をねじ伏せる運動でなく、説得力ある

暖かい心で人を動かした。

多くの研究者や自然を尊ぶ人々を結集し、彼らから自然を護る意味を知った。そしてこうしたリゾート開発が進められようとした根源、本質を理解した。さまざまな団体、個人との連携が大きな力であることを認識し、あらゆる関係機関と接触し連帯を拡大した。

北海道には様々な自然保護団体がある。組織的な運動を嫌って個人で自然を護る行動を起こしている人々も多い。こうした人々に心の共感を与えていったことは、女性のソフト感覚と粘っこさなのか。それとも人間の尊厳と文化の意味を理解する洞察力の深さか。

開発推進派の人々を敵に追い込むのではなく、自然保護を共に考える仲間に変えた。

北海道の地域開発に反対する運動は外部団体によって組織され、行動に移されることが多く、地元住民が迷惑するという推進派も出るほどだ。地域の封鎖性や血縁・地縁集団構成からみて地域内部では反対と思っただけでもアピールしたり、行動に起こしたりするのは難しい場合が多い。ユウバリコザクラの会のように地域内部の文化

を創造する立場からの運動は大きな価値をもっている。

主婦の粘り強い、喧嘩腰にならない運動が多くの人々の共感を呼んだことは間違いない。

「森に生まれる水よ、どうぞ伝えてよ、ふるえる命のあることを、ふるえる命のあることを」

ユウバリコザクラの会の運動は単に夕張岳の自然を護るだけでなく、地域の文化を守る運動として捉え、21世紀を生き抜く人々の教訓にしたい。